The SEIKYO GIFT セイキョウ ギフト

スマイル

自分らしく

私には、忘れられない創大時代（27期）の思い出がある。朝霧寮の寮長として参加した大学行事。創立者・池田先生が留学生と共に歌い、一人一人を励ます姿に胸が熱くなった。「創立者の期待に応えたい」。あの日の決意は今も、胸の中で燃えている。今、この一瞬を大切に。目の前の人を笑顔にできる自分になりたい（夫・浩貴さん㊧、三女・舞生さん㊨と）

私の願い…

舌がんの完治

信仰体験

〝あれ、これ何だろう？〟。舌の裏側に〝イボ〟のようなものがあった。痛みはないが、徐々に大きくなっていく。千葉県松戸市の小柳史子さん（45）＝支部女性部長＝は3年前、歯科健診で口腔外科の受診を勧められた。診てもらうと、医師の顔が曇った。「がんの可能性があります」。〝まさか……〟。頭は真っ白なのに、自然と涙があふれ頬を伝う。優しく、心配性の夫・浩貴さん（52）＝杜年部員＝も落ち込んでいた。がんセンターでの精密検査。「結果を待つ日々が、とてつもなく怖かった」。〝良性であってほしい〟との願いは届かず、診断は「ステージ2の舌がん」。

〝この先、どうなって……〟。

不安ばかりが募っていった。

（2月1日付）

三女・舞生さんが撮影

後遺症が残っても ママは変わらない

私が「がん」だと告げたら、子どもたちは、どう思うだろう。当時、長女は高校生。次女は中学生。長男と三女は小学生だった。できるなら、この子たちを不安にさせたくない。私だと泣いてしまいそうだから、夫が代わりに説明してくれた。

――ママが病気になったこと。2週間くらい入院すること。手術をしなければならないこと――。

夫の話に、子どもたちは皆、驚き泣いていた。〝つらい思いさせて、ごめんね〟。子どもたちの涙を見ることは、本当に苦しかった。

「ベロを切るから、手術した後、ママの話し方が変わっちゃうかもしれないんだ」。夫が伝えると、長女が泣きながら言った。「どんな傷や後遺症が残っても、ママはママで変わらないから！」って。

その言葉が、うれしくて、うれしくて。〝この子たちのもとに、笑顔で帰ろう〟。固く心に決めた。

首のリンパ節への転移はみられなかった。お医者さんは「将来のことを考えて、リンパ節を取るか決めてください」って。取るなら「左耳の下から首下まで切る」と言われた。

絶対に手術した方がいい。頭では分かってる。でも〝首を切る〟というのが、どうしても怖くて……。

そんな時、真っ先に励ましてくださったのが、地区の歯さんと女性部の先輩方だった。「小柳さんには、大きな使命があるんだね。必ず乗り越えられるよ」。確信あふれる言葉で不安を和らげてくれた。

創大時代の同級生に電話して「思うように祈れないんだ」と打ち明けた。返ってきたのは力強いエールだった。「私たちが祈ってるから！無理して祈らなくていいよ。その声が胸を温めてくれた。

〝多くの人たちが、私の完治を祈ってくださっている。こんなに心強いことはない。私は絶対、大丈夫。安心して手術に臨もう〟

ひとたび腹が決まると、それからは弾むような、力強い題目をあげることができた。うれしかったのは、それまで、信心に積極的ではなかった夫が毎朝、私と一緒に勤行・唱題をしてくれるようになったこと。

がんになって苦しいことばかりだったけど、こんなに幸せなこともあるんだって、うれしかった。

入院した私の代わりに、お義母さんと母が子どもたちを見守り、支えてくれた。心残りは、長男と三女の運動会を見に行ってあげられなかったこと。長女と次女がスマホで、ライブ中継してくれた。リレーのアンカーとして、1位でゴールテープを切った息子。〝ママ、見えた!?　やったー！〟。家族の笑顔に、泣き虫な私は、また涙。〝みんな、ありがとう。ママも頑張るからね〟

三村新町地区の座談会

1位で切った ゴールテープ

心は生き生き！病魔に負けない

介護福祉士の 試験に合格

ようやく日常が戻っても、会話はやっぱり不安で、ラ行など発音しにくい言葉があった。「え？」って聞き返されたり、「どうしたの？」って言われるのが怖くて……。〝なるべくなら、人と話したくない〟と、思ってしまうこともあった。

そんな恐怖心を和らげてくれたのは、学会の会合だった。

地区女性部長だった私は、協議会や座談会などで話をすることが多かった。最初は勇気が要ったけど、〝地区の皆さんは全部分かってくださっている。だから、安心して話そう〟と思い切ることができた。

きっと、聞き取りにくい言葉もあったと思う。でも皆さんが温かく見守り続けてくれたおかげで、人目を気にせず話せるようになった。

今は、3カ月に一度、がんの定期検診に通っている。その中で、励みになったのは、夢に向かって努力を重ねる長女の姿だった。体調不良を乗り越えて、昨年、念願だった大学医学部の合格をつかんだ。

私も子どもたちと一緒にステップアップしていきたい。支部女性部長としてフル回転の日々の中、地域や社会でも信頼を築こうと決めた。

私は、折伏した友人が紹介してくれた職場で介護の仕事をしている。入院中、職場の皆さんが何度も励ましてくださった。恩返しの思いで、昨年、介護福祉士の資格試験に挑戦。合格でき、正社員として迎えてもらうことができた。次は、社会福祉士の資格取得を目指し、ますます仕事と勉強に励みたい。

闘病の経験と学会活動で学んだ「同苦の心」「寄り添う力」を社会に還元しながら、縁する人への感謝を胸に、使命の舞台で輝きたい。

同室の〝戦友〟へ 手渡した本

手術当日の朝――わが家では、4人の子どもたちがそろって、勤行・唱題をしてくれた。真心の祈りに包まれて、手術室に入る。腫瘍と舌の一部、首のリンパ節を切除し、4時間の手術は無事に終わった。でも、本当の闘いは、ここからだった。

数日間は高熱が続き、吐き気もひどかった。口の中は腫れ、つばも飲み込めない。首も管につながれ、体が動かせなかった。〝大丈夫、絶対大丈夫〟。必死にそう言い聞かせながら、胸の中で題目を唱えた。

1週間がたち、体は動かせるようになったけど、口の中の感覚は元に戻らなかった。舌がうまく動かなくて、思うように発音できない。

心の支えだったのは、池田先生の言葉だった。『四季の励まし』にこうあった。「たとえ病気になっても、心は生き生きと！――絶対に負けてはいけない。戦う心まで病魔に食い破られてはならない」

〝そうだ。病魔なんかに負けてたまるか。夫と子どもたちのもとに、笑顔で帰るんだ〟。言語聴覚士の方に支えられながら、発音の練習に、前向きに取り組んでいった。

病室の隣のベッドに、70代くらいのご婦人が入院されていた。私よりも大変な病状で、懸命に治療に励んでいらした。〝この方にも、私が勇気をもらった池田先生の言葉を届けたい〟。心の中で題目を唱えながら、勇気を出して「私、この本を読んで、すごく励まされたんです。ぜひ一度、読んでみませんか」と、先生の本を手渡した。

ご婦人は、じっくりと読んでくださり、後日、ほほ笑みながら「とても感動したよ。ありがとう」って。〝勇気を出して良かった〟。退院した今も連絡を取り、「がんと闘う戦友」として、励まし合っている。